

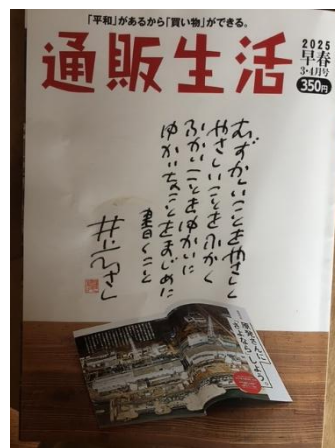
めだか談義

メダカ発、世の中つれづれの記。2026・01・18



久米宏が亡くなりました。1985 年から 2004 年まで「ニュースステーション」のキャスターとして、(アメリカではアンカーマンとも呼ばれます)、それまでのアナウンサーがニュースを伝える報道番組の常識を壊すスタイルを生み出しました。

印象に残っているのは、日航機の墜落事故の報道でした。520 名の犠牲者をただ数字で語るのではなく、そのひとりひとりに人生があったことを伝えるにはどのような工夫が必要だろうと考え、スタジオに 520 足の靴を座席表のカタチで並べてみせたのでしたね。革靴あり、ヒールあり、スニーカーあり、草履あり、上等な靴もあれば、そうではない靴もある。靴はその時の人間を語ることが出来るという信念を彼は抱いたのでした。ちょうど夏の帰省シーズンでもあり、おばあちゃんの家に向かう子どもいれば、緊急の会議に向かうビジネスマンもいたでしょう、もちろん寄せ集めた靴ですから本物ではないのですが、一瞬にしてこの人たちの人生を遮断してしまった事故の恐ろしさを物語ることとなりました。久米宏は言っていました。「中学生にも理解できる報道番組を」と。写真は、最近の「通販生活」の表紙なのですが、脚本家井上ひさしの名言を伝えています。これは何年か前の「めだか談義」でも紹介しましたが、広告コピーの基本の基本、難しいことは分かりやすく、カンタンに伝えなければということです。だから、中学生の国語力があれば、コピーライターを名乗ることは出来る書いた記憶があります。ただ本物のコピーライターかどうかは、「批判の眼」というか、ジャーナリズムの目線を合わせ持てるかと言えるのですが。そうした意味合いから、久米宏は、アナウンサーではなくニュースキャスター、ジャーナリストだったと言っても良いと思われます。それまでも、TBS には田英夫さんがいたりしてキャスターと呼ばれていましたが、(大衆化)という意味では久米宏には及びませんでした。かろうじて、久米さんと同時代に、TBS には筑紫哲也さんも人気を集めましたね。番組作りの主導権を持てるアナウンサーなどいなかった時代、報道番組に新しい風を吹き込んでくれた、久米宏さんに、合掌です。



さて、難しいことをカンタンに伝える、これはこれでこれこそ「難しい」。普段、「持続可能性」とか「生態系保全」とか何気なく使っている言葉の意味、これを本当に理解できているのかと自分でも時折、不安にかられることがあるのですね。先日、日本河川協会が発行する機関誌「河川文化」から取材を受けて、酒匂川のメダカについてインタビューを受けました。最終的に、まとめられた原稿は記者がまとめたものとなりましたが、一部、自分が寄せた原稿がそのまま使われました。

以下、こんな文章でした。

「田んぼ」に依存しているメダカたちにとっては、「田んぼ」の減少こそ火急の問題。メダカだけではなく、「田んぼ」は、水生昆虫や、鳥、両生類、植物たちが、それぞれの役割を果たしながら、まるでオーケストラが交響曲を奏でるように「生態系」を成り立たせている、いわば、「音楽堂」のような場所。現地では、豊富な湧水と、農業用水路の土壁や石積みの護岸を維持する農家など～

これを読んで山田さん「上手い事言うねえ」と感心するではありませんか。自分の原稿ですよと否定しませんでした。山田さんに伝わるなら良かったのかなと思う反面、比喩表現に過剰装飾があるかなあとも自分では感じていて。伝える極意、亡き久米宏さんに教わりたいです。

「生態系」の意味を、どうかみ砕いて伝えられるか？